

# 大学入学共通テストの段階表示を合否判定に用いた 新しい入試制度の設計

森川 修 (鳥取大学), 三井 規裕 (桃山学院大学), 山根 俊喜 (鳥取大学)

鳥取大学では、2025 (令和7) 年度入試から、工学部全学科で大学入学共通テストを課す総合型選抜Ⅱ (仮称) を新たに実施予定である。その新しい入試において、大学入学共通テストの成績を素点でなく、2021 (令和3) 年度入試から新たに提供されている「段階表示 (スタナイン)」を利用することとした。本論文では、全国の大学で初めて大学入学共通テストの段階表示を合否判定に用いた新しい入試制度の設計について、段階表示を利用する意義、高校教員からの意見や学内での検討状況について紹介する。

キーワード：総合型選抜、段階表示、スタナイン、新入試、大学入学共通テスト

## 1 はじめに (1点刻みによる試験からの脱却)

2013 (平成25) 年10月31日に教育再生実行会議第四次提言である「高等学校教育と大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について」に“知識偏重の1点刻みの試験による選抜によって、本来伸びるはずの若者の能力を損ねることがあってはならない”との文言が記載された。その中で、大学入試センター試験を高等学校教育の基礎的・共通的な学習の達成度を客観的に把握し、各大学で推薦入試やAO入試にも活用できる「達成度テスト (基礎レベル) (仮称)」と大学教育を受けるために必要な能力を評価し判定するための新たな試験「達成度テスト (発展レベル) (仮称)」の2種類の試験を設定し、それらを活用し、さらにそれぞれの大学の創意工夫により、能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定する入学者選抜に転換することが必要と記された。

2014 (平成26) 年12月22日に中央教育審議会は、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について (答申)」を発表した。その中では、現行の大学入試センター試験を廃止し、新テストとして「大学入学希望者学力評価テスト (仮称)」を実施すると明記された。大学入学希望者学力評価テスト (仮称) の在り方の中に“「1点刻み」の客観性にとらわれた評価から脱し、各大学の個別選抜における多様な評価方法の導入を促進する観点から、大学及び大学入学希望者に対して、段階別表示による成績提供を行う。”と記載された。このように、「1点刻みによる試験からの脱却」について、10年ほど前から議論がなされてきた。

## 2 大学入学共通テストの段階表示

2017 (平成29) 年7月13日に公表された「高大接続改革の実施方針の策定について」の中で、大学入学希望者学力評価テスト (仮称) は、「大学入学共通テスト」という名称に決定し、その内容には、英語の4技能 (読む・聞く・話す・書く) を適切に評価するため、民間事業者等が実施している資格・検定試験の活用や、国語と数学において、記述式問題を導入することが含まれていた。英語の資格・検定試験の活用と国語と数学での記述式問題の導入については、直接影響を受ける高校・大学関係者のみならず、国民の間で大きな議論を呼んだ入試改革の案だった。しかし、英語の民間試験活用の延期は、受験者のID登録の初日である2019 (令和元) 年11月1日に発表された。また、国語と数学での記述式問題の実施見送りは、2019 (令和元) 年12月17日に公表された。いずれも実施の1年余り前に行われなかったことが決定した。

大学入試センター試験から大学入学共通テストへの移行において「段階表示」の導入も新しい取り組みとして挙げられる。先に示した英語の資格・検定試験の活用と国語と数学での記述式問題の導入と比較して一般的に認知度は低く、関係者でも把握している人は多くないように思われるが、これは、大学共通テストの受験案内に記載されている。図1に示すように、受験者を得点順におおよそ4, 7, 12, 17, 20, 17, 12, 7, 4%の9つの群に分割し、科目別得点の低い方から順に1から9の9段階に換算する「スタナイン」という方法を用いたものである (文部科学省, 2019)。この方法は、平均点や得点分布の違いに関わらず、受験者が各科目の受験者の中でどういう位置にいるかがわかることが最大の特色である。これは、「1点刻みによ

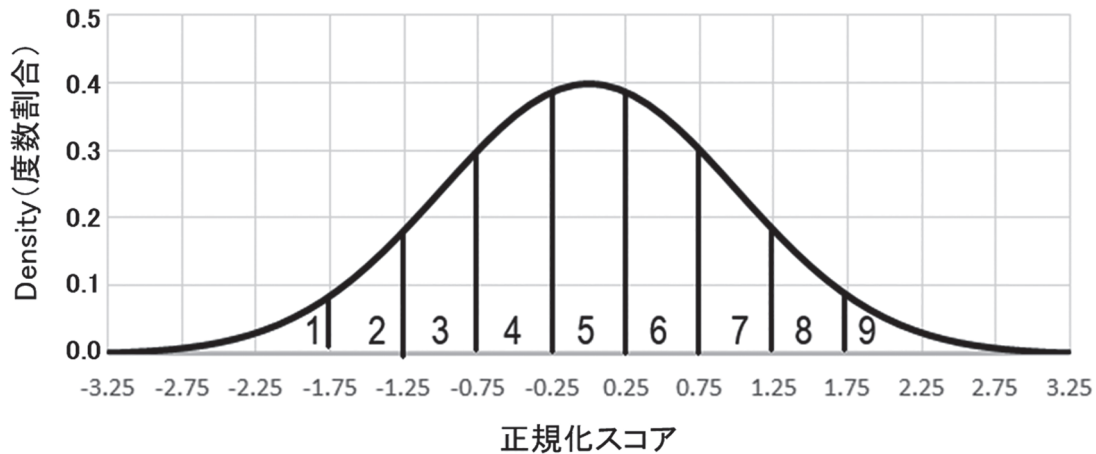


図1. 段階表示（スタナイン）（実際には等間隔に分離点が並ぶわけではない）

る試験からの脱却」を図る1つの方法と考えられる。科目別得点等における段階表示の換算表については、大学入学共通テスト実施5日後の金曜日に、大学入試センターがホームページで発表することとなっている。そのため、段階表示を入試に利用する大学が個別に計算して発表する必要がなく、広く受験生等に告知しているため、受験者の相対的位置を表す他の指標より活用しやすいと思われる。

この段階表示を個別大学の入試に導入する場合、合否ライン前後で同点者が多数となる可能性がある。実際に、2023（令和5）年度鳥取大学一般選抜前期日程で工学部の4学科で調査したところ、複数の学科で合否ライン付近に同点者が複数名存在した。大学は入学定員厳格化のため、できるだけ入学定員に近づけるように合格者数を決定する必要があることから、特に、一般選抜における段階表示の利用は難しいと思われる。

文部科学省は、全国の大学に2021（令和3）年度大学入学選抜で段階表示による成績の活用状況に関する調査を行った（文部科学省，2021）。この年は大学入試センター試験に代わり、大学入学共通テストが導入された初年度である。調査の回収率は98.9%（856大学が回答）だった。その結果、「合否判定への利用」、「合否判定以外への利用」とも1大学もなかった。いずれの利用についても「今後の活用について検討中」が15%程度と低く、85%程度が「今後も活用する予定なし」であった。「今後も活用する予定なし」の理由として、「段階表示はテストの識別性能を劣化させるだけなので、メリットがない。」、「学内や世間に段階表示を許容する文化がない。」などが挙げられていた。一方で「今後の活用について検討中」とした主な意見では、「多面的評価の一環で段階表示が活用できない

か今後検討予定。」、「小論文や面接等とあわせて評価し、判定に利用することを検討。」、「総合型選抜を導入する際に今後の利用について検討予定。」などが挙げられていた。

その後も2023（令和5）年度入試までの3年間に入試の合否判定に使われた例は確認できなかったが、静岡理工科大学が給付奨学金の選考に利用していた（静岡理工科大学，2022）。

### 3 大学入学共通テストの得点調整（テストの等化）

テスト（試験）の等化は、大変難しい問題であり、日本で一番受験者数の多いテストである大学入試センター試験の実施において、関係者は対応してきた（大学入試センター，2020）。大学入学共通テストに変わってからも地理歴史・公民と理科のうち、あらかじめ指定された科目間において、1万人以上が受験し、原則として平均点で20点以上の差が開いた場合、「分位点差縮小法」という方式を用いて平均点差が15点となるように得点調整を行うとされている。直近では、2023（令和5）年度の理科②では、物理と生物の平均点の差が23.65点で、化学も含めた3科目間で得点調整が実施された。また、20点以上の点差がなかった科目に対しても公平性の観点から得点調整をする（大学入試センター，2022）。さまざまな議論はあるが、30年以上前からこの方法で実施されてきた。

この得点調整に関して、大学入試センターでは、2022（令和4）年11月に「大学入学共通テスト得点調整の実施条件・方法の改善についての提言」（得点調整検討部会審議のまとめ）を公表した。それは、科目間の平均点の差が15点以上かつ成績の段階表示（スタナイン）が同じ段階での得点差が20点以上生じた

場合に行うというものである。これに関して、2023(令和5)年2月までの約3カ月に渡って、高校関係や大学関係者等の意見を募集した。その意見を反映させ、2023(令和5)年6月9日の「令和7年度大学入学選抜に係る大学入学共通テストの得点調整の実施条件・方法について」で公表された。

この得点調整の改善により同一教科内における科目間格差の解消につながる可能性がある一方、毎年のように得点調整が行われる事態となれば、国公立大学の一般選抜への出願において、受験生は、非常に短期間での出願大学の決定を余儀なくされるだろう。

#### 4 大学入学共通テストの素点と段階の関係

表1に、2021(令和3)年度大学入学共通テストの化学と生物の段階と素点の得点範囲を示した。例えば65点を取った場合を考えると、化学では平均点よりも7点以上高く、生物の場合は平均点よりも7点以上も低い得点である。しかし、これまでの入試では各教科・科目の合計点で合否判定をするために、化学でも生物でも同じウエイトとして扱うため、不公平と感じる者もいるだろう。この年は、化学と生物の間の平均点差は15.05だったため、得点調整は行われなかった。

表1 2021(令和3)年度大学入学共通テストの化学と生物の段階と素点の得点範囲

科目	化学	生物
段階	得点範囲	得点範囲
9	91 - 100	97 - 100
8	83 - 90	93 - 96
7	75 - 82	88 - 92
6	64 - 74	81 - 87
5	52 - 63	71 - 80
4	41 - 51	60 - 70
3	32 - 40	47 - 69
2	23 - 31	34 - 46
1	0 - 22	0 - 33
平均点	57.59	72.64

ところが、段階表示を用いた場合、化学で65点を取った者は段階「6」、生物で65点を取った者は段階「4」となる。それぞれで平均点よりも高い場合と低い場合でも同じ得点とするより合理的で、テストの等化の1つの方法と考えられる。もちろん、全体を9つにしか分けられないことから、文部科学省の調査の回答で「テストの識別性能を劣化させるだけ」との指摘があったが、

数万人以上が受験したテストで平均点より低い者と高い者を同じに扱うよりも妥当であるとする考え方もある。

#### 5 大学入学共通テストの段階表示を利用した新しい入試制度の設計

大学入学共通テストの段階表示は、受験者のおおまかな学力レベルを測る基準に活用できると考えられる。2章で述べたように、定員の多い一般選抜では同点者が複数現れる可能性があるため導入は難しいが、定員の少ない総合型選抜や学校推薦型選抜での導入は十分に検討できると思われた。

大学入学共通テストの段階表示を入試に用いる場合、各教科・科目の段階の合計点を「学力レベルの担保」として利用できると考えた。これに関して、林(2023)は「資格試験的な利用」と述べているが、考え方はまったく同じであり、それを新しく設計する入試では、素点を段階へ置き換えただけのものである。大学入学共通テストの素点を用いた「資格試験的な利用」は以前からいくつかの大学で利用されている(林, 2023)。

鳥取大学でも医学部生命科学科の学校推薦型選抜IIで10年以上前から「資格試験的な利用」を実施してきた。2023(令和5)年度の学生募集要項の合否判定方法には「大学入学共通テストの数学・理科・外国語の合計が概ね70%に満たない場合は、合格者となりえないことがあります。(下線筆者)」との文章を記載し、学力の目安を示している。「概ね」と断っているのは、テストの平均点を60%と仮定して想定しているため、平均点はその仮定から大きく外れた場合、基準が変わることもある。例えば、2022(令和4)年度の大学入学共通テストの場合、数学の平均点は、①の数学I・数学Aで37.96、②の数学II・数学Bで43.06だった。これは仮定よりも大幅に低かったため、数学・理科・外国語の合計点が70%未満でも合格とした場合があった。

「資格試験的な利用」を素点ではなく、段階とすることでこの問題は解消される。例えば、上記の鳥取大学医学部生命科学科を例とすると「3教科5科目の段階の合計が29点以下は合格者となりえないことがあります。」のようにすると、合格最低点が明らかとなるため、受験者や高校教員にも明確で分かりやすいと思われる。平均点や得点分布の違いに関わらず、受験者本人が各科目の全受験者の中でどういう位置に居るかがわかるという、段階表示の最大の特徴を活かすことができる。



また、段階と偏差値には密接な関係がある。実際の結果ではきわめて稀な例であるが、仮にテストの得点が正規分布である場合には、段階表示（スタナイン）では、段階「5」が偏差値  $50.0 \pm 2.5$  となり、それより段階が1つ増減するごとに偏差値も5.0変化する。偏差値は、高校生や高校教員にとって馴染みがある。3年生になると毎月のように受験産業が実施している模擬試験を受験する。その際、大学入学共通テストと同じようなマークシート形式の模擬試験であれば、その結果は得点とともに偏差値としても提供されるため、段階の目安になる。例えば、大学入学共通テストを受験する前に出願させる総合型選抜や学校推薦型選抜で、事前に合格の目安となる段階を提示しておけば、受験生はそれを目標に勉強し、出願することが予想される。これらの選抜で志願者は、志望度が非常に高く、意欲の高い者と期待される。

そこで、鳥取大学では、これまで述べたように、「1点刻みによる試験からの脱却」、「学力レベルの担保とその目安を分かりやすく提示できる」、「志望度の高い者に出願してもらう」、「定員管理への影響を小さくする」、これらを基本理念とし、大学入学共通テストの段階表示を利用した新しい入試制度を次のように設計した。まず、入試区分は総合型選抜とした。学校推薦型選抜にすると、志願者所属学校長の推薦書が必要となり、その推薦書の作成には、高等学校等の教員に大きな労力をかけてしまうが、総合型選抜であれば推薦書が不要となる。次に出願期間は11月上旬とし、ここでは、調査書の他に志望理由書を提出させる。それらの書類を基に12月に面接を行う。その後、1月に大学入学共通テストを受験する。合否判定は、大学入学共通テストの指定した教科・科目の段階の合計点が基準を下回らないことを条件とし、その成績と面接における点数と合わせて行う。合格発表は2月上旬、入学手続を2月中旬とする計画である。

## 6 高校教員への調査

2021（令和3）年12月に進学関連業者を通じて、高校教員に対して総合型選抜に関する調査を行う中で、段階表示を用いる新入試に関する内容も含めた。この調査内容の詳細は業務委託契約上、明らかにできないが、大学入学共通テストの段階表示を活用することに関して半数程度が肯定的だった。否定的な意見を詳しく見ると、文部科学省が大学へ調査した際と同様に「段階表示」自体を正しく理解していない、あるいは、そもそも大学入学共通テストの「段階表示」自体を知らない、などの意見が多かった。

大学入学共通テストの段階表示は、成績請求をする素点とともに記載されている。しかし、実施して3年間、どの大学も入試に活用していないことで、理解が浸透していない可能性がある。大学入学共通テストの段階表示を利用した入試を理解してもらうためには、段階表示そのものの説明から丁寧に行うことが重要であると推察される。

そこで、毎年6月に実施している高校教員対象説明会を活用し、2025（令和7）年度入試の変更点として説明し、その後、理解度を測るため、アンケートと称して、段階表示を事前知っていたか、鳥取大学工学部であればどのくらいの基準が望ましいかなどを尋ねた。対象者は鳥取県外の教員とし、154名の参加者中、ちょうど100名から回答を得られた。

段階表示を内容まで把握していた人は16名で、名前も内容も知らない人が54名と半数を超えていた。また、基準点（この点数以下を合格としない）をどの程度にすれば良いかを尋ねた。その際に、現在の一般選抜での段階を示した。鳥取大学工学部の前期日程合格者の平均の段階は5程度である。それを説明したにも関わらず、6を超える値の回答も散見された。段階表示に関して、高校教員の正しい理解がなければ、志願してもらえないと考えられる。そのため、入試の実施までの間、段階表示自体や入試制度について、さらに詳細な説明をして理解を促す必要であることが明確となった。

## 7 学内での検討状況

大学入学共通テストの段階表示を利用した新しい入試制度は2025（令和7）年度入試から実施する計画とした。その理由は、この年度から新しい学習指導要領の内容による入試が始まるため、この年に限り、旧課程履修者用の問題も作成されることとなる。そのため、このタイミングで段階表示を活用することで、通常の年度より多種類の科目間において「等化」に近い取り扱いができると考えたためである。

入試における変更等について、入学志願者の準備に大きな影響を及ぼす場合には、2年程度前には予告・公表することとされている。そのため、新しい入試制度を2025（令和7）年度入試から実施するためには、2022（令和4）年度中での公表が必要であった。

鳥取大学で「段階表示」を用いる入試制度について、入試に関連する教員に対して話題提供をしたのは、2022（令和4）年4月だった。ここでは、主に2点を説明した。1つは国立大学協会が2015（平成27）年9月に公表した「国立大学の将来ビジョンに関するアク

シヨンプラン 工程表」に、推薦入試、AO入試、国際バカロレア入試等を拡大し、第3期中期目標期間(2021(平成33)年度)終了までに、入学定員の30%を目標とすることが記載されたが、鳥取大学では2022(令和4)年度入試において20.3%と目標を達成していないことである。もう1つは、2024年(令和6年)入試までに、入学希望者総数が入学定員総数を下回る「大学全入時代」に突入することである。今後の入試において、大学入学共通テストの結果で志望する一般選抜でなく、大学入学共通テストの実施前に出願させ、志望度の高い生徒の獲得が必要であることを伝えた。また、入試は「選抜」ではなく、「マッチング」に変わっていくであろうことも伝えた。その後、6章で述べた高校教員への調査結果を共有し、理系学部のある学科を想定した総合型選抜Ⅱ(大学入学共通テストを課す)において大学入学共通テストを素点でなく、段階表示を活用する方法について初めて説明した。

この案に対し、最初に興味を持ったのが工学部化学バイオ系学科だった。この学科は、一般選抜後期日程の定員が約40%と高く、近年の後期日程の欠席率を考慮して定員の削減を検討していた。さらに、学校推薦型選抜Ⅱも志願者が少なく、新しい入試方法を検討することとなった。その後、工学部の入試委員会で説明し、工学部の4学科すべてで検討が行われた。段階表示のメリットとして、偏差値として置き換えができること、同一教科の科目間だけでなく、他教科の間でも活用でき、ある程度の学力レベルが分かることを挙げた。また、学科では、大学(学科)で学ぶために必要な教科・科目と最低限の学力レベルを明示することの重要性を説明し、まず、「2年前告知」に必要な大学入学共通テストの教科科目数とその種類の設定について検討してもらった。

その結果、工学部の4学科のうち、化学バイオ系学科と社会システム土木系学科の2学科で新たに大学入学共通テストを課す総合型選抜の導入を決定した。いずれの学科もすでに学校推薦型選抜Ⅱを実施しているが、大学入学共通テストの利用教科・科目数が、一般選抜と同じであったため、その削減を提案し、化学バイオ系学科は3教科5科目、社会システム土木系学科は3教科4科目の設定とした。特に、化学バイオ系学科では、数学と理科はそれぞれ2科目とし、残りの1教科は語学が必要と考え、国語と英語のいずれかの選択(高得点科目を採用)とした。科目間だけでなく、教科間において高得点のものを選択できることは、段階表示を利用するメリットを活かしていると言える。

そして、2022(令和4)年12月20日に総合型選抜

Ⅱ(仮称)の新設を公表(予告)し、その中で「大学入学共通テストの成績について、段階表示(スタナイン)の利用を検討しています。」と記載した。大学入試において、初めて大学入学共通テストの段階表示の活用を言及した。

2023(令和5)年度入試で、工学部の一般選抜前期日程の志願者が前年の60%以下と危機的な状況となり、他の2学科も4月の工学部入試委員会において、大学入学共通テストを課す総合型選抜の導入を決定した。その後、学内の手続きを経て、7月19日に公表した。

今後は、出願時期などのスケジュールや募集人員の決定、学科での必要な基礎学力レベルとして大学入学共通テストの段階をどのようにするか、教科・科目に傾斜配点をつけるか、面接の内容や提出書類をどのようにするかなどについて、高校側の意見も取り入れつつ、2023(令和5)年度内にそれらの詳細を明らかにする予定である。

## 8 まとめ

2023(令和5)年度の大学入試、特に地方国立大学では、一般選抜の志願者減少に悩まされたところが多かったと思われる。鳥取大学全体で、前期日程で約15%、後期日程では約30%の志願者減となった。また、受験率も年々低下しており、特に後期日程での減少は著しく、2023(令和5)年度入試では、30%以下となった。そのため、1学科において入学者数が定員を下回った。志願者が減少しているのは、地元ではなく都市部であった。これまでも、都市部の高校生(またはその保護者)がひとり暮らしを避けて自宅から通える大学を選ぶ傾向がみられた。

また、近年では、受験を早く終わらせたいと思う高校生も増加しており、私立大学の指定校推薦など、年内に進路先を決定する傾向が高まっており、私立大学では57.4%の者が、総合型選抜、あるいは、学校推薦型選抜で入学している(文部科学省,2023)。そのため、国立大学の一般選抜での志願者はさらに減少すると思われる、国立大学協会の示した一般選抜以外の入試が3割を超える日も近いだろう。

一方で、早期に大学合格決定者が増えると高校教育に悪影響を与えると話す高校教員も多い。私立大学の指定校推薦で進路を決定する者が多い高校では、「年末になると、クラス内で勉強する雰囲気が保つことが難しい。」と語る教員が居る。また、大学進学者が多数を占める高校の教員からは、「せめて、大学入学共通テストまではしっかりと勉強して欲しい。」との声

もある。

これらを考えると年内に出願と面接を行い、その後  
に大学入学共通テストを受験し、その段階表示を活用  
することで、大学（正確には各学科）が求める学力レ  
ベルを超えていることを確認できる。これに加え、面  
接や出願書類等で志願者の能力・意欲・適性などを多  
面的に評価する入試は、新しい時代にふさわしい高大  
接続の実現に向けた大学入試の改革と言えるだろう。

また、この選抜方法は、1つの個別大学の事例では  
なく、他大学においても十分に活用できると思われる。  
大学入学共通テストの段階表示が、大学入試における  
基礎学力のレベルを測定する指標として広がることを  
期待したい。

## 注

三井規裕の現所属は桃山学院大学であるが、2023  
年3月31日まで鳥取大学であった。

## 参考文献

- 中央教育審議会（2014年12月22日）。「新しい時代にふさ  
わしい高大接続の実現に向けた 高等学校教育、大学教育、  
大学入学者選抜の一体的改革について」、  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/  
chukyo0/toushin/\\_icsFiles/afiedfile/  
2015/01/14/1354191.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afiedfile/2015/01/14/1354191.pdf) (2023年8月30日)
- 大学入試センター（2020）。「『センター試験』を振り返る」、  
179 - 187.
- 大学入試センター（2022）。「令和5年度大学入学者選抜に係  
る大学入学共通テスト受験案内」、52 - 53.
- 大学入試センター（2022年11月16日）。「得点調整の実施  
条件・方法の改善に関する意見募集について」、  
[https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken\\_jouhou/r7ikou/  
r7tokutentyousei\\_ikenbosyuu.html](https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/shiken_jouhou/r7ikou/r7tokutentyousei_ikenbosyuu.html) (2023年4月27日)
- 林篤裕（2015）。「共通試験における『資格試験的な利用』の  
意味することとは」『大学入試研究ジャーナル』33, 141  
- 146.
- 国立大学協会（2015年9月14日）。「国立大学の将来ビジョ  
ンに関するアクションプラン」、  
<https://www.janu.jp/janu/voice/actionplan/> (2023年8  
月30日)
- 教育再生実行会議（2015年10月31日）。「高等学校教育と  
大学教育との接続・大学入学者選抜の在り方について（第  
四次提言）」、  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/  
chukyo3/047/siryo/\\_icsFiles/afiedfile/2013/  
12/26/1342755\\_05.pdf](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afiedfile/2013/12/26/1342755_05.pdf) (2023年8月30日)

- 文部科学省（2019年2月12日）。「高大接続改革の進捗状況」  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/  
detail/\\_icsFiles/afiedfile/2019/02/12/1413420\\_3.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/02/12/1413420_3.pdf)  
(2023年8月30日)
- 文部科学省（2021年6月28日）。「大学入学共通テスト（ス  
タナイン）に関する調査結果について」  
[https://www.mext.go.jp/content/20210628-mxt\\_  
daigakuc02-000016425\\_19\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210628-mxt_daigakuc02-000016425_19_1.pdf) (2023年8月30日)
- 文部科学省（2023年1月25日）。「令和4年度国公立大学・  
短期大学入学者選抜実施状況の概要」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/2020/  
1414952\\_00004.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/2020/1414952_00004.htm) (2023年8月30日)
- 静岡理工科大学（2022年9月）。「データサイエンス専攻の  
選抜について」  
[https://www.sist.ac.jp/about/ex/data\\_science.html](https://www.sist.ac.jp/about/ex/data_science.html) (2023  
年8月30日)
- 鳥取大学（2022年10月28日）。「令和5（2023）年度 学校  
推薦型選抜Ⅱ 学生募集要項 [大学入学共通テストを課す  
学校推薦型選抜] 11月出願開始分（対象：医学部）」、  
[https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/  
uploads/2022/10/r5\\_suisen2\\_i\\_tokubetsu\\_youkou.pdf](https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2022/10/r5_suisen2_i_tokubetsu_youkou.pdf)  
(2023年8月30日)
- 鳥取大学（2022年12月20日）。「令和7（2025）年度鳥取大  
学入学者選抜における総合型選抜Ⅱ（仮称）の新設等につ  
いて（予告）」、  
[https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/  
uploads/2022/12/r7\\_kougakubu\\_yokoku.pdf](https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2022/12/r7_kougakubu_yokoku.pdf) (2023年8  
月30日)
- 鳥取大学（2023年7月19日）。「令和7（2025）年度鳥取大  
学入学者選抜の実施教科・科目等について（令和5年7月  
修正）」、  
[https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/  
uploads/2023/08/r7\\_kyoutakamoku-20230817.pdf](https://www.admissions.adm.tottori-u.ac.jp/wp-content/uploads/2023/08/r7_kyoutakamoku-20230817.pdf) (2023  
年8月30日)